

工藤吉隆公顕彰碑

昭和9年、小松原に駆けつけ宗祖日蓮大聖人の急を救った工藤吉隆公の法勲を永く讃えるために、小湊誕生寺・今井日誘上人、池上本門寺・酒井日慎上人らが発起人となり、当山に顕彰碑が建立された。

上部の陽刻「不惜身命」は、海軍中将・小笠原長生氏の筆になる。「不惜身命」（ふしゃくしんみょう）とは、法華経譬喩品に説かれる「仏道修行のためには身命も惜しまないこと」であり、「死をもいとわぬ決意」のことである。

その下には、海軍中将・佐藤鐵太郎氏の筆になる「房州天津日澄寺開山日玉上人伝」が陰刻されている。この文章は、身延山久遠寺第36世・六牙院日潮上人の著書『本化別頭仏祖統紀』に収められる。

当山は、日潮上人を縁祖と仰ぐ「潮師法縁」に属する。また、顕彰碑の揮毫者である小笠原長生氏・佐藤鐵太郎氏はともに日蓮宗の信者として知られ、清澄寺旭が森の銅像建立の願主にも名を連ねる。

～関係者の略歴と顕彰碑の内容～

六牙院日潮【りくげいんにっちょう】(1674—1748)

京都に生まれ、8歳の時に深草瑞光寺の慧明院日燈上人について出家。のち智寂院日省上人に師事した。京都松ヶ崎檀林に学び、19歳の時に飯高檀林に入学。宝永5(1708)年、35歳で上座に昇る。翌年、松ヶ崎檀林に帰って『法華文句』を講じ、37歳で仙台孝勝寺に晋山した。享保5(1720)年、飯高檀林化主として学徒を教育し、元文元(1836)年63歳の時、身延山久遠寺第36世として晋山。在山9ヵ年にして延享元(1744)年に退山し、寛延元年9月20日、病のため75歳で遷化。

日潮上人の著書『本化別頭仏祖統紀』(39巻)は、宗祖日蓮大聖人の第450遠忌を期して、享保16(1731)年に脱稿したもの。日蓮聖人、六老僧、諸山の先師を列伝体の形式で述べたもので、多くの門弟の助力により膨大な史料を蒐集し、体系化した内容は日蓮教団史上、最初の宗門史書として大きな位置を占める。

小笠原長生【おがさわらながなり】



佐賀県出身 海軍軍人

慶応3年11月20日（1867. 12. 15）－昭和33（1958）年9月20日 92歳

海軍中将・正二位・勲一等・功四級・子爵

鐵櫻院殿無畏長生日來大居士（烏山・幸龍寺）

唐津藩主・小笠原長行の長男。明治6年に家督を相続。学習院、攻玉社を経て明治17年に海軍兵学校に入学。卒業後、日進、天城、八重山などに乗艦し、明治27年には高千穂の分隊長として日清戦争に従軍した。戦後は軍令部に出仕し、日清戦史編纂委員を務めた。

明治35年から浅間分隊長、千代田副長など海上勤務を経て、明治37年に軍令部参謀として日露戦争を迎える。日露戦争後も戦史編纂委員を務めている。

その後も軍令部参謀や艦長などを歴任し、大正8年に中将で退役。昭和20年まで宮中顧問官を務めた。退役後は東郷平八郎の伝記など多数の著書を執筆している。

佐藤鐵太郎【さとうてつたろう】



山形県出身 海軍軍人・貴族院議員・学習院教授

慶応2年7月13日（1866. 8. 22）－昭和17（1942）年3月4日 75歳

海軍中将・正三位・勲一等瑞宝章・功三級

海雄院殿藍溪日忠大居士（多磨霊園）

明治17年に中学を中退、上京して海軍兵学校に入学。卒業後は筑波、浪速などに乗艦し、明治27年の日清戦争では赤城の航海長として従軍。黄海海戦では負傷しながらも戦死した艦長に代わり指揮を執った。その後、軍務局勤務、米英駐在、海大教官などを経て、明治36年に第二艦隊参謀に着任。日本海海戦ではスワロフの回頭を舵の故障と見抜き、臨機応変な作戦具申で敵艦隊撃滅に貢献している。

戦後は海大教官、海大校長、軍令部次長などを歴任。「帝国国防史論」を発表するなど海軍戦史の大家と目されていたが、その強硬論が軍縮に悪影響を与えることを加藤友三郎が危惧し、大正12年に中将で予備役編入となった。

不 惜 身 命

篆刻 宮中顧問官海軍中將從二位勲一等功四級子爵小笠原長生書

師諱日玉号妙隆院俗姓者平以工藤為氏俗名者左近丞吉隆父云小四郎行光以庶繼宗領房州天津県而居具有真言寺乃工藤一家香華之場也建長之中左近丞吉隆直于鎌倉拜謁高祖夙善所撼執弟子礼操履確乎弘長元年辛酉高祖左豆之伊東吉隆審問不懈馳俸竭志二年壬戌高祖製別頭四恩書謝之文永元年甲子高祖房之小松原為平景信被囿射矢如雨亦光成電高祖僅十數人無奈之耳法子鏡忍死矣景信痛逼時左近丞吉隆在天津而聞之叫馳力戰景信更加精兵吉隆戰敗遂死矣是時微吉隆高祖殆危乎哉依賜諡号以僧礼而祭之呼妙隆院日玉上人高祖屏舍真言寺法孫日澄御寺主論宗義更衣授寺改榜呼日澄寺澄也讓功日玉為開祖自居第二代位焉天津日澄寺今猶繁盛兒童呼工藤走卒知日玉潮初系于優婆塞列伝傍有少沙弥卒爾曰玉上小松原之功過于比富池波之護法也遠矣矧乎高祖以僧礼哉何不旌異之潮曰然也小驅烏亦稱之者惟玉上懿行余烈也豈誣之乎乃呼毛穎移是耳矣

昭和九年秋日為天津日澄寺謹錄本化別頭仏祖統紀日玉上人伝

海軍中將從三位勲一等功三級佐藤鉄太郎（花押）

不 惜 身 命

篆刻 宮中顧問官海軍中將從二位勲一等功四級子爵小笠原長生書

師、諱は日玉、妙隆院と号す。俗姓は平、工藤を以て氏と為す。俗名は左近亟吉隆。父を小四郎行光と云ふ。庶を以て宗を継ぎ、房州天津県を領して居す。県に真言寺有り。乃ち工藤一家の香華の場なり。建長の中、左近亟吉隆、鎌倉に直し高祖に拜謁す。夙に善の撼す所、弟子の礼を執りて操履確乎たり。弘長元年辛酉、高祖、豆の伊東に左せらる。吉隆、審問懈らず、伴を馳せ志を竭くす。二年壬辰、高祖、別頭四恩書を製して之を謝す。文永元年甲子、高祖、房の小松原にして平景信が為に困まれ、射る矢雨のごとく、亦光電を成す。高祖、僅かに十数人、之を奈んともする無し。法子鏡忍、死しぬ。景信、痛逼時に、左近亟吉隆、天津に在りて之を聞く。叫び馳せて力戦す。景信、更に精兵を加え、吉隆、戦敗して遂に死す。是の時吉隆微かりせば、高祖殆と危ふひかな。依りて諡号を賜ひ、僧の礼を以て之を祭り、妙隆院日玉上人と呼ぶ。高祖、真言寺に屏舍す。法孫日澄、御たり寺主、宗義を論じ、衣を更へ寺を授け、勝を改めて日澄寺と呼ぶ。澄、功を譲り、日玉を開祖と為し、自ら第二代位に居す。天津日澄寺今猶繁盛す。兒童も工藤を呼び、走卒も日玉を知る。潮、初め優婆塞列伝に系く。傍に少沙弥有り。卒爾として曰く「玉上、小松原の功比富池波の護法に過ぎたること遠し。矧んや高祖、僧の礼を以てするをや。何ぞ之を旌異せず。」潮曰く「然なり」。小駆鳥も亦之を称する者惟り。玉上懿の行余烈なり。豈に之といひて誣ひんや。乃ち毛穎を呼びて是に移すのみ。

昭和九年秋日 天津日澄寺の為に本化別頭仏祖統紀日玉上人伝を謹録す

海軍中將從三位勲一等功三級佐藤鉄太郎 (花押)